
海女神～ムイ・ヤハィタ～

鈴子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海女神〜ムイ・ヤハイタ〜

【Nコード】

N0823BA

【作者名】

鈴子

【あらすじ】

海に住む化け物と女神と、ある青年の物語。

序章（前書き）

自転車操業で、今の自分が書きたいと思う文章をゴリゴリ書かせて頂きます。宜しくお願い致します。

序章

海が荒れている。漁師らは今にも吹き飛ばされそうな帆を畳むのに、必死の体である。顔中を叩いてくる飛沫は水というよりも、ひとつの化け物のようだ。痛いし邪魔だし、舐めると塩辛く、濡れると重く体力を殺ぐ。口に入れるなど叱られても、勝手に入ってくるのだと言いついたくなる。

だが実際には、もっと恐ろしい化け物が海には棲んでいる。内心では皆、出会わぬようにと祈りながら漁をしている。海賊も恐ろしいが、それ以上だ。こんな嵐の日には、なおさらである。もうすぐ日も暮れる。ただでさえ効かない視界がゼロになることは、死を宣告されると同じ意味を持つ。

暗くなくとも、会いたくはない。

「おい」

「何だ！」

「あれ」

”彼ら”は時間のべつまくなしに、やってくる。

明らかに荒れる波とは異質な音が、漁師らの耳をつんざく。音というほうが正しい表現に思えるが、海の者なら誰しもが知っている、それは声である。

化け物という意味を持つ者、ギウンディが放つ鳴き声である。

飛沫のため目を開けられないでいる男たちをあざ笑うかの鳴き声が、すぐ近くで起こる。距離感が掴めない。大きな船ではない。仲間は全部で9人しかいない、小さな漁船だ。大海原へ出ていくための船ではない。船板ぐらいいは張ってあるが、船底で何泊もはできない。沖で小さく、つつましく魚をだけ取って生計を立てている程度の漁である。

と懇願しても、ギウンディの耳には届かない。彼らは人間の言葉を持たない。人間　ヒウンディの。

ギウンディと、ヒュンディ。

響きが似ている通り、化け物は人間の姿に似ている。胴体は直立型で5本指のついた手足を持ち、髪の代わりにヒレがついている以外は、頭の形も酷似している。ただし、ついている目は金色をしており正面でなく側面にあり大きく、鼻もなく、開けた口の中に見える歯はどれも尖っている。獲物が切り刻みやすいように。

そう。人間の身体でさえも……。

「うわ、うわああ!？」

漁師の一人が声を上げる。

とはいえ、まだ子供と言える年齢の者である。

初めて目にした怪物に茫然となり、目前に見えていた歯並びが、ぐわっと自分めがけて迫ってきたことに瞬時に反応できなかったのだ。頭を守ろうと振りかざした彼の手にギウンディの歯並びが、ざつくりと食い込んだ。血が舞い、肉片が飛ぶ。船がきしむ。

「サーレ!」

彼を助けに飛び込んだ仲間もまた、化け物の爪にえぐられた。うなり吠える声が、荒れる海に重なる。

皆が槍を手にして近づこうとするも、揺れて、まともに歩けない濡れた床に足を取られる。ギウンディの加勢をするかの波のうねりに、体力だけでなく気力も削り取られていく。飛沫が赤色に染まる。木造の小さな船が、惨劇に耐えかねるかのようにギリギリと鳴く。畳んだ帆の重みで柱が、今にも折れそうなほどにたわんだ。

「危ない!」

食われた仲間の手を取るか、柱が折れるのを防ぎに支えるか。

漁師の選択は、残酷だが決まっている。

すでに頭が半分なくなっていたからというのは言い訳に過ぎないが、それでも全員の脳裏にその言い訳がよぎったのは、言うまでもない。手の届いた者が皆、柱にしがみつく。海が鳴る。化け物が鳴く。

「くそっ」

船が平らになった瞬間を見計らった男が、柱から手を放して槍を構える。幸い漁師見習いの少年は生きていた。サーレと叫んで下からせる、その左手が真っ赤に染まっているのが目に入ったが、今は手当てをしてやる余裕などない。

少年は歯を噛みしめて痛みには耐えながら、ギウンディを見据えている。目に焼き付けて、忘れじとしている。

船のへりを昇ってくる化け物らの頭が、ちらほらと見えている。

3つは目に入った。そのうちのひとつに焦点を絞って、男は槍をふりかぶりながら走る。

「このおおおっ！」

渾身の一撃が、ギウンディの頭を捕らえた。放たれる血が、噴水のように海飛沫に混じる。波の音と化け物の断末魔が混じる。悲鳴と叫声が混じる。仲間を殺された嘆きは、どちらも同じだ。同じだけの吠えあい、船のへりを隔てて繰り広げられる。

次はどちらが死ぬか、海が凧ぐのが先か、船が壊れる方が早いのか。そんな思いがよぎったのは、誰の心にだっただろうか。

だが祈りにも似た思いに込めたのは、さらなる戦闘の幕開けではなかった。

すつ、と。

空気が揺れた。

歌が流れたのだ。

ひしめきあう人混みをすり抜けるかの、荒れ狂う生き物にも似て人々を惑わす海をなだめるかの静かな声が、静かであるにも関わらず、漁師らの耳に流れてきたのである。

いや、声はヒュンディの耳にだけでなく、ギウンディの耳にも彼らにも「耳」という機能があるならば、だが 届いていた。

突然、彼らもまた動きを止めていたのである。漁師らと共に。

甘く柔らかく、それでいて峻烈に心に入り込んでくる。聞きなれた町の歌とはまったく異質な、目が覚めるのか夢の中へと誘われているのか、まるで術にかかった気分になる歌である。

いや、実際に何らかの術なのかも知れない。

どこの国の言葉であるかすらも分からないはずの歌詞が、彼らの頭に「帰りなさい」という意味を届けるのである。

「怒りを鎮め、帰りなさい。これ以上の血は無益。互いの領分を守り、互いの住処に帰りなさい」

どうしてだか、そんな風に聴こえる声に、疑問を持つ者はいない。ギウンディと同様、声の正体を知らない者がないからだ。

いや、本当のところの正体は、誰も知らない。海に住まう、美しい歌を歌う主であるとしか知らない。だが、それだけで充分である。歌声はいつも、ヒュンディを助けてくれる。

互いの矛を収めた化け物たちは、いつしか止んだ海の中へと帰っていく。波が静まり、歌声を一層響かせている。美しい女神ヤハイタを連想させる声の主は、誰にともなく、こう呼ばれている。

「ムイ・ヤハイタの歌が……」

ムイ海ヤハイタの、女神。

「助かったな」

「ああ」

口々に無事を確かめ合いながら、漁師らは頭を食われて死んだ仲間、ソフンの身体を海に帰す準備を進める。誰も可哀想に、などとは言わない。海で生きる男が海に死ぬのは、本望だ。

ギウンディと戦う覚悟も、もちろんできているのである。

手当てを受けた少年は、歌声が引いた後も水平線を眺め、呟くのであった。

「ムイ・ヤハイタ……」

一度に海的地獄と天国とを両方味わってしまった彼の衝撃たるや、計り知れない。

そうして彼らは網を引き上げ、魚を乗せて陸へと帰る。網を確かめる瞬間が、漁師らにとって一番の楽しみ時だ。

「一粒かかったぞ！ しかも、なかなか大きい」

船長が言い、皆に手に持つものを見せる。皆から、わずかに歓声

が湧く。食べられるものではない。指先ほどの大きさしかない、小さな石である。

ただし、透明なまでに輝く、だが血のように赤いという不思議な宝石である。

「大きな」

「色が濃いのに透明度も高い」

「綺麗だな」

「高く売れる」

「今は野暮を言っなよ」

「そっだぞ」

口々に皆が石について語り、ようやく戦いからの緊張感もほぐれた頃、皆の目に岸が見えてくる。これで漁の終わりだ。

夜のとばりが降り始める港に、薪の灯台が光をもたらしている。ほわりと光に浮かぶ砂地に、木製の栈橋が並んでいる。光の向こうでは、気の早いパブなら看板を出している頃だ。今夜は皆で祝杯である。

一粒で祝杯の上がる石、ムイ・プリ。海の滴。

彼らがギウンディと戦う覚悟を決めている、その理由を占めている。

序章（後書き）

今の計画からすると、相当長くなります。単行本一冊分、書けたらいいなと思います。お付き合い下さる方があれば幸いです。

1章　酒場にて前

豪華なドレスには金糸とレースがふんだんに縫い込まれており、腰を細く、袖と裾を大きく広げてある。ペチコートを入れてドレスを大きく膨らませるデザインが起用されたのは、まだ一昨年のことだ。流行り好きのマダムが海向この国から取り入れ、王女が暮れの舞踏会でお披露目をし、去年の秋に貴族や金持ち商人連中へ広まり、今年に中流社会まで大流行となったスタイルである。ちよつと重なるだけで豪華に見えて、体型も隠せる辺りが婦人らの希望になった。

そして胸に、血の宝石を。

ムイ・プリを着けることが、この国サヴィーバヤの習慣であり、誇りでもある。

「とはいえ俺は、以前のすらつと細かったドレスの方が好みだがね」「減多なことを言うな。国中のご婦人を敵に回すぞ」

「お前だつて内心は賛成だろう」

ご婦人方の耳に入らぬようボヤク相方に苦笑し肩を竦めつつ、彼は足を進める。豪華なドレスの婦人は、洋服屋が張るテントの中だ。聞こえてはいなかったと思いたい。彼女は、じきに開演なのである。う夜会へのドレス選びに、ご執心である。

「今日の夜会」

「ん？」

「行かなくて良かったのか？」

相方に問われて、彼は目を細めた。

「細いドレスのご婦人がいれば、参加するのだがね」

「言つたな、この野郎」

肩をこづかれ、笑みを見せる。本気で心配してくれているとは、わかつているつもりだ。こうして町歩きにも付き合ってくれる、数多の女性と浮き名を流し軽薄さを世に知らしめている男だが、その

実とても真面目で身内思いの従兄殿である。

大通りの石畳でテントを出す店ともなると、高級店とまでは行かないが、貴族も買いにやってくる。闊歩する人々の質も、どこことなく品がいい。物売りは声を張り上げて売り込みをすることもない。ただし囁き声すら、よく通る。

だが、通りを変えれば町の風情も変わる。

城壁をひとつくぐるたびに、人々の暮らしは落ちていく。2つ通ったところで彼らは、手にしていたマントで身体を覆った。綺麗なものではない。旅で使い古したような茶色の汚い布切れだ。

道に並べてあった石が消え、行き交う人々の服が汚れ、靴は革のものから布製やサンダルへと変わり、売り込みの声が大きく下品になっていく。店で扱う商品は、宝石やドレス、武器などではなく、野菜や魚、農耕具へと変わる。

ドレスの好みすら囁けない上品な町並みよりも、活気と喧噪に溢れている下町の方が、彼らは好きだ。

「いらつしゃーい！ とれたての魚だよ」

叫ばれる言葉に嘘はない。すぐ目前には、海が広がっている。城壁をすべて抜けた先に見えるのは、木造の港と水平線である。昼間から酔った男が桟橋の縁に引っかかっている光景などは日常茶飯事だし、怪しげな商品を手にうるつく物売りも一種の風物詩だ。

もう日が暮れており、酔っぱらいの数も多い。歩きにくいほど人がたまっている小道もある。済まない、と声をかけて彼がすり抜けるのを、誰も見咎めない。マントを頭からかぶっているから、中に着込んでいる貴族の風体は隠れている。

木と石を組んで泥で塗り固めたような建造物が雑多に並ぶ港町の中を、彼らは迷わずに歩き進む。ドレスに文句をつける色男が下町の道に慣れている理由は、女性を物色せんがためだが、もう一人は違う。

彼らは、通りにせり出ている看板を見て、ふと立ち止まった。ジョッキの絵と値段らしき数字、店の名前だろう固有名詞の掘られて

いる木切れには、矢印も掘つてある。2人は矢印の通りに、横道へ入る。すきま風が潮と料理の匂いを彼らの鼻に届けた。ハーブで焼いた魚のようだ。マントの下から笑みが漏れる。

豪奢でない扉にも質素な看板が張り付けてあり、一度見ただけでは記憶に残らないような、立て看板にあった名と同じものが手書きしてある。だが実際、文字を見て覚えられる確率は低いものだ。サヴィーバヤの識字率は約半分……殆どは政治屋と商人が占めている。玄関灯は暗めだが、ほわりと柔らかい色合いを地面に落としている。玄関マットには砂や埃がなく、魚の柄まで縫われていて微笑ましい。彼はそつとノブに手をかけた。

扉をくぐれば、そこそこ席が埋まっているものの、やかましくはなかった。グループ客は少なく、常連らしき風貌の男たちが慣れた風に注文をしている。丸テーブルが5つ、カウンター席が7つ、客は15人……素早く目を走らせる。

彼らは一番奥のテーブル席を陣取ると、マントを脱がずに麦酒を注文した。それと、もう一品。

「タウボレを」

告げられた娘が若干、表情を堅くした。が、すぐ笑顔に戻り、きびすを返して厨房に戻る。ひかえめにひるがえった青いスカートが、爽やかな印象を残した。

しばらくしてテーブルに乗ったのは、麦酒だけである。

それと、来客だ。

酒場の熱気に紛れて現れた男は、ごく当たり前の顔をして彼らが座るテーブルに同席した。運ばれている麦酒は3つ置いてある。3人ともが同時にジョッキを手にして、乾杯をした。

自己紹介はしない。この男がタウボレであると、2人とも分かっているからだ。だが会うのは初めてである。つてを頼り口を利いてもらい金を掴ませ会う方法を学び、今日のこの日に至ったのである。自ら、この界隈をうろついたため、彼は港を歩き慣れている。

「それで？」

マントのまま、彼はさっそく口火を切ったのだった。

「まあ旦那。まずは一口、飲みましようや。話は長い」

「長いのは困るな。短くまとめてくれよ」

従兄が軽口を叩いて、場を和ませんとする。それほどに相方が殺気立っているのを、彼は見てとったのだ。第3の男が　　タウボレが警戒している。

「旦那はよせ。サーレでいい」

「……！」

従兄、シユユサガムは息を飲んだ。シユユサガムが、シーユという愛称を持つと同じで、サーレも愛称とはいえ本名に近い。が、タウボレは気づかないようで、じゃあサーレ、と呼んでから本題を切り出したのだった。

「あんたの探し人。見つけたが、サヴィーバヤに召還する前に、行方不明になっちまったんだよ」

「話にならない」

サーレは、わざと胸の財布に触れて、音を聞かせてみせた。初老にさしかかろうかという風貌、古ぼけた上着を新品にしたいと願っているタウボレには、魅力的な音色だ。

彼はジョッキを傾けて舌なめずりをしてから「まあ待つてくれよ」と、ゆつくり笑みを作って見せた。

「俺の本職は情報屋だぜ。人の手配もするが、人を動かしている間に古くなっちまうのが、情報つてもんだ。常に新鮮なネタを集めておくのが肝心かつ、難しいことよ」

タウボレのごたくを聞く2人の表情は、店の暗がりとマントとに隠れているが、こういった感情を表しているのかは想像に難い。それでも初老の男は余裕の笑みを崩さない。

「行方不明になったとはいえ、手がかりだつて押さえてあるさ」

「もったいぶるなよ。手がかりがあるなら、人を回して召還してくれたらいいじゃないか。謝礼だつて倍以上になるというのに」

シーユが出す呆れ声は、店内の雑音にかき消えるほどに低く小さ

い。そもそも彼らに注意を向ける客はいないのだが、用心に越したことはない。相棒がバカ正直に漏らした名「サーレ」を知っている者が、いないとも限らないからだ。

「あいにく、手がかりつてのが、人には行けない場所なんだよ。人間^{ンディ}には」

タウボレは「人間」の発音を強調した。強調される意味が分からない2人ではない。ここ、海の国に住むヒュンディなら。

「まさか……ギウンディが関係するのか」

特に声を低くして、サーレが呟く。

1章 酒場にて後

店内の者らには聞きつけられなかったようである。彼らの耳に入れば、話し声が叫びに変わる。港の酒場だ、誰もがギウンディには少なかれ畏怖を抱いている。海の化け物には。

初老の男は、応えない代わりに酒をあおった。

2人も口を湿らせる気になり、同時に杯を傾ける。

冷えていたはずの麦酒は、店の熱気と時間の経過によって、なま暖かかった。喉を鳴らして飲む気にはなれず、本当に口を湿らせたに過ぎなかった。

店にいる者たちの給金からすれば、飲み干さねば勿体ない酒である。だが2人の胃にまで納めるには至らない質である。今は己の発した言葉ながら、ギウンディの存在が頭を占めていて、とても酒を味わう気分ではない。

タウボレの目が己の左手に向いていることを悟り、サーレは手をマントの下に隠した。手袋が革製の、いいものだったから見咎められたようだ。

……と、思いたい。

重い沈黙が3人を取り巻いた後、振り払うようにタウボレが「場所、島だ」と、ささやいた。

「やつらがたむろする沖の向こうにある、ティンヴィム諸島のどこかだ。情報では3つ目の島、ソトバングアイにしていると聞いたが、もう移動した可能性がある。サヴィーバヤの海域だが、隣国と近い。陸路を行くなら山を越え、隣国の砂漠を抜けてから船に乗らないと行けない」

知っている。国の地理ぐらいは、もちろん隣国とて頭に叩き込んでいる。通行証も得られる、陸路は不可能ではない。

だが。

「化け物退治ができるなら、海を突っ切る方が早いだろうがね」

付け加えられたタウボレの言葉は、諦めに似た響きを含んでいる。だが全く同じ言葉を発しても、サーレの口から出れば諦めでなく挑戦と挑発の響きに変わる。

「突っ切るさ」

「おい」

シーユがすかさず、声を上げた。

サーレの、決意にも似た呟きを遮った理由は、それが無謀だからではない。彼に化け物退治の能力が備わっていることは、シーユと知っているのだ。彼が言いたいのは、サーレ自身が出立する気になっっていることへの、警告だった。

だがタウボレはこれを、前者の意味で受け取ったらしい。ニヤと笑うと、話が早いねとサーレを誉めた。そして、マントの下にひっこめたサーレの左手を指さしたのだった。

「喰われたのかね？」

やはりバレていた。

サーレは、こともなげに左手を掲げてみせた。手袋を取らず、他の者には見られないように、だが。

「半分な。2・5本はある」

特製の手袋には、偽の指が仕込んである。ぱつと見では分からないが、知る者が見れば、それと知れるものだ。

指どころか、足や腕を無くした者として港には多い。命があっただけ儲けものだったのさと慰められるのが常である。それだけ海は危険なのだ。

タウボレは下手な慰めを口にせず、

「ならば恨みも大きかろう」

とだけ呟いた。どうやら彼も、自身の身体が身内かをギウンディにやられたことがあるらしい。サーレは初めてタウボレに親近感を持った。

「残念だが俺の人脈では、沖を突っ切る気概のあるヤツらが揃えられない。お前さんの能力と運に、女神の加護があるよう祈るよ」

タウボレの挨拶は、どうやら本心である。去る素振りを見せる彼にサーレは小さな皮袋を渡した。チャラリと金属同士の当たる音が鳴る。手に取り中身を改めた途端、タウボレの目が見開かれた。驚愕は、怒りと失望の色を含んでいる。

老人が怒号を発する前に、サーレが「前金だ」と固く告げた。

「残りは成功報酬とさせてもらう。あんたの情報が正しいかを証明する術がないからな」

「……っ」

タウボレは唇を噛み、罵倒を麦酒と共に飲み込む。青二才がとか何とか呟いたのは聞き逃さなかったが、サーレはあえて聞こえない振りをする。シーユも口を出さず、従弟の手腕を見守っている。

しかし意外にもタウボレは「なら、お帰りをお待ちしていますよ」と、あっさり引き下がったのである。さすが、こういう商売をしているとトラブルも多いのだろう。ごねて面倒を起こすより、目の餌だけをついばんで飛びさるのが利口であろう。

サーレは、そう理解したのだが……。

立ち上がったタウボレが最後に残した言葉は、違った。

「ご武運を。王子様」

2人ともが思わず息を飲んで、何も言えなかった。タウボレは振り向きざまにニツと笑い、情報屋を舐めないで下さいよ、と敬語を使う。

「子供のなかった第三王妃様に引き取られた、亡き第二王妃の息子ウィサウレイヤ。公には広まっていない身内での愛称が、サーレだ。ところが第三王妃様が男子をご出産なされたことにより、今や地位を追われる身。愛称を呼ばれることも少なくなりましたでしょうな。第一王妃様に揺るぎないお世継ぎが3人もあることから世間の注目は浴びないものの、そろそろ適齢期であらせられることから、ご婦人方からの好奇の目は、浴びておられましょう」

鋭い眼光で秘密の詠唱をするように告げると、タウボレは初老の下品な男に様子を变えて去ってしまった。残された青年2人は、半

ばぽかんと見送るしか出来なかった。

だが直後、料理の匂いが鼻先にまで迫ってきたため、意識をテーブルに戻さざるを得なくなり、見れば 青いスカートの娘が、魚のハーブ焼きをテーブルに乗せるところだった。

「これは、」

注文を間違えているのではと抗議しかけたシーユの目前に顔を突きだし、娘が笑う。

「タウボレからよ。これ食べないと、うちに来た意味がないわ」

確かに、湯気と共に立ちのぼるハーブの、刺激的な中にもまるやかさが漂う香りは、絶品だ。店独自のブレンドなのだろう。シーユが複雑な笑顔で、湯気を鼻いっぱい吸い込んで味わっている。

「5種類以上は使ってるな。どのハーブをどう調整しているのか、さっぱり分かん。うちの料理長に嗅がせたら、さぞ悔しがって負け惜しみのひとつも言いそうだ」

女性と同じくらい飲食に目がない彼にしては、完全な敗北宣言だ。論をとなえるより先に、2人とも素直に腹が反応している有様である。これは、ぜひ味わって帰らないといけない。

「タウボレがこれを誇る相手に、悪い人はいないわ。逆にあんたたちも、もっと彼を信用していいって証よ。残さず食べてって」

そういう意味合いのある料理だとは思わなかった。2人の表情が明らかに緩んだのだろう。娘はくすりと笑って、テーブルを離れていった。

タウボレに露呈していた事実は問題だったが、ひとまずは安心していいらしい。王族の厄介者ウイサウレイヤは、密かな庶民の味方でもある。お忍びでの町歩きは当たり前、漁業組合にだって首を突っ込むし自分の船も持っている。

タウボレは、サーレが持つ独自の船をも知っていたのだろう。持ち主は別にしてあるし、サーレ自身とて、さすがにたまにしか船には乗れない。けれど秘密を知る者がいないとは限らなかった、それだけの話だ。

「行くつもりだな」

シーユが呟く。返答は、するまでもない。

彼もそう思ったのだろう。サーレの返答を待たずして、すぐに肩を竦めてシーユは「俺も行くぞ」と笑ったのだった。

「何を……！？」

「しっ」

声を上げたけた従弟に指を立てて、辺りに目を走らせる。注目を浴びかけた。そろそろ術が切れかけているようだ。存在を目立たぬようにする術である。いるが、目に入らない。マントを取らぬ不審な客であろうと、気にならない。

「文字通り、これこそが乗りかかった船ってところか」

呟いてシーユは「とつとと食っちゃおう」と即す。聞く耳は持たないらしい。早く立ち去らなければならぬのは事実だ。ここは、とにかくまず食べるしかない。説得するのは帰ってからにしよう。

そう決めたのは、どちらだったか。

2人は改めて乾杯をして、魚の姿焼きとの格闘を始めたのだった。

2章　茶会にて

普段着にまで大きなドレスのスタイルが取り入れられるようになったのは、いつからだったか。そんなことを思いながらサーレは、中庭で茶器を手にさざめく女性たちをテラスから眺める。

敷地の端が見えないほど広い庭には林に草原、花畑、小川、噴水と揃っている。サヴィーバヤでは見たことがないような木も建っている、これは義母の趣味だ。貴婦人方がお茶をたしなむため造られたベンチやテーブル、あづまやは、そこかしこに置いてある。めいめいが好みの者と共に座り込み、庭を堪能しながら遊びに興じたり、くつろいだりするのだ。様々な噂話が飛び交い、男女ならば睦言も囁かれる。

まだ始まったばかりの茶会は、誰が誰と共に過ごそうかと探りを入れている状態だ。離れた屋敷の2階からでも分かるほどの謀略は、他人事なら面白い。だがじきに自分も、あの輪に入らなければならない。

昨日のマント姿は陰もなく、こちらも普段着とは思えぬほどの煌めきだ。王子たるもの、このぐらいいは身につけておられなければと義母に着せさせられている服である。紺地に銀と黒の刺繍のチュニツク、皮を縫って鉄を仕込んだブーツ。

もう暖かい。冬でも上着一枚着込めば過ごせるような国だ。隣国から嫁いできた義母^{はは}からすれば暑苦しい国と形容されるが、だつたら、もっと涼しい格好をすれば良いだけの話だとサーレは内心で反論している。日中の普段着など、シャツ一枚とズボン、皮布を紐でしばったサンダルがあれば充分だ。外出でも、上にはせいぜいベストを羽織る程度である。

あと熱中症除けのバンダナと、もし海にまで出るなら銛を持ち、腰に短剣を差し……。

「ウイサウレイヤ」

伸びた金髪をひとつに括り、毛先を風になびかせながら物思いにふけるサーレは、すぐには自分の名が呼ばれたことに気づかなかった。

「ウィサウレイヤ！」

まるで自分の名だと感じられない。呼ぶ者の声に、愛情がこもっていないせいなのかも知れない。手すりから身を起こして、振り返ってサーレは彼女の手を取り、膝を折った。

「お義母様。コンディアヌ。今日もお美しい」

「どうぞディーヌと。戯れ言はおよし下さい。しよせん私は子を産んだ身。体型は崩れ、見る陰もございません」

「そのようなこと、」

「だって、あなたは私の夜会姿になど興味をお持ちじゃありませんものね」

昨夜の件だ。夜会に出席しなかったことを咎めに来たらしい。どうして私の許可なしに義母を入室させるのだ、侍女め……となじつても侍女に罪はない。義母の屋敷だ。

茶会への呼び出しならば、侍女が呼びに来れば済む。客人を放つても直接サーレをなじりに来たかったらしいディーヌの苛立ちは、相当なものだと覚悟せねばならない。

内心で苦虫をかみ潰しつつ、サーレは言い訳を考えて脳を回転させる。

「私ごときの目に満足なさる、お義母様ではないでしょうに。むしろ私のいない方が、あなたも蝶のごとく自由に飛び回れて、華やかさが増すというもの」

「そうね、あなたも私のいない方が、水を得た魚になれるようですし」

つんと唇をとがらせるディーヌは、まるで少女のようである。男を誘惑して放さない黒い瞳は常に潤んでおり、愛を囁いても毒舌を吐き出しても可愛らしいと王にため息をつかせている唇は、化粧を施さずとも赤く艶やかに輝いている。黒く長い異国の髪もエキゾチ

ツクで、何もせずとも結い上げてても美しい、と賞賛される。本当の年齢を、王ですら知らないほどだ。聞いた話では30を過ぎて半ばになるそうだが、その年で子供を産み、かつ美貌を保っていることは驚異とも言える。

「昨日のドレスは海雲ムイ・ブリを直接縫いつけた、特製品だったのですよ。

あなたの夜会着にも私のドレスと同じ布を使ったというのに」

「その夜会着はぜひ、お義母様の正統な息子であらせられるセンジュエナのために、とっておいて下さい。私には勿体ない」

「あなたも私の息子です。それに、ジューナが大きくなる頃なんて、とつくに流行遅れだわ。糸も古くなるし」

困った。どんな言い回しをしても、悪い方に受け取られる精神状態らしい。逆らわぬが吉とばかりに、サーレは義母の手にキスを落とした。テラスにいる以上、庭にいる誰かには見られるだろうが、だからこそおかしい噂にはならないだろう。手から上へのキスは、絶対に避けなければならない。

第二王妃の忘れ形見が継母とできている、などと。

「どうしても外せぬ用事があり、夜会に間に合いませんでした。お義母様の顔を立てるためにも、次は必ず出席します」

はつきり透き通る声で告げると、さあもう行かなければとデイーヌを即す。部屋は、サーレの個室である。図書館かと見まごうほどの室内を、じろじろと見られるわけには行かない。幸い文字に疎い彼女が、ここの蔵書に興味を持ったことはない。

本を手に取りられる危険もさることながら、問題は彼女が長く居座ることだ。あらぬ疑いは避けたい。ただでさえ微妙な立場なのに、父王の后を寝取ったと噂されては極刑も免れない。

デイーヌが、それを狙って自分を誘惑しているのだろうかと思わないでもなかったが。

輝かしいドレス姿は、目のやり場に困るほど大きく胸が開いている。どちらかと言えば、ドレスの裾が床に積み上がっている本の山を引きずって崩していることの方が心配ではあるのだが、だからと

いつて、まじまじとは見られない。

しかしディー又は、まるでサーレが彼女に見とれていたかのように「あら」と伏せた目でサーレを眺め、微笑むのだ。

「このドレスが、あなたの好みですか？　で、あれば、次の夜会にも似たデザインのドレスを作らせるとしましょう」

「滅相もない、私の好みなど……」

違うと否定するのは簡単だが、そのことで彼女の機嫌をそこなうと色々と面倒だ。サーレとしては、このまま義母の企みをやり過して、無事に第一王妃の息子が即位するよう陰で尽力するのみである。

だから海へ出たい、という願望もある。

窮屈な服を着せられて子供騙しのような剣の稽古をしているくらいなら、例えば指を喰われた過去があろうとも、海へ出る方がよほどいい。でなくばこうして部屋にこもり読書に明け暮れる方が、まだましだ。

なのに義母は、母という名を冠しているにも関わらず、悩ましげな目を息子に向ける。

「ねえ、サーレ。私の息子。あなたは、どんどんたくましくなるわね」

サーレは、無意識のうちに後ずさっていた。ディー又は傷ついた様子もなく、ただ微笑んで立っている。早く出ていってくれという心の叫びは、彼女に届かない。

「日に焼けて浅黒くなった肌は王族らしくないけれど、かえって魅力的だわ。金の髪と水色の瞳に、よく映えてる。あなたの生みの母、ティハ二ナも綺麗な瞳を持った方だった」

実の母を挙げられて、サーレが固まる。サーレを産んだがために病気を患い、10年たっても治らず亡くなった人だ。彼女が病気をサーレのせいにしたことなど一度もなかったが、父王や周囲の者から浴びる非難にも似た哀れみの目は、幼かったサーレの心をむしばむに充分なうちだった。父王に愛された記憶は、ない。

彼を抱きしめてくれたことがある者はただ一人、乳母だけだ。だが乳母もサーレがディーヌに引き取られた際に解雇されて、サーレは孤立した。

剣仲間と学院の友人と、漁師の仕事を得るまでは。

ドアが部屋の外から、二度叩かれた。

「サーレ？ 部屋にいと聞いたが」

昨夜の声、従兄殿である。サーレは救い主に「いるよ」と呼びかけてから、悪態をついてみせる。

「午後のお茶会なら、もう中庭で始まっているよ。君の目当ての令嬢が来ているんじゃないのか？」

ドアの向こうからは若干とまどった空気が感じられたが、すぐに返答は返ってきた。

「かも知れないが、一人では恥ずかしい。だから君を呼びに来たんだ」

察しのいい従兄で助かる。

きっと侍女から、義母も室内にいと聞いていたのだろう。コンディアヌ様がおいでですからと困る侍女を振り切って闊歩してきたのだろうシーユの様子が、手に取るように想像できる。

サーレは「さあ」と義母に手を差しのべ、扉へと引率する。

「皆様がお待ちでらっしゃる。私とシュユサガムの2人を引き連れてなら、遅刻の非礼も許されましょう」

笑みを見せると、ようやくディーヌもそうねと折れた。サーレの皮手袋をした右手に、レースの手袋を着けた左手を乗せて、背筋を伸ばして歩き出す。どれほど手を重ねようとも、2人の心は手袋の厚みだけ離れ、触れあうことがない。

手袋を外す気はないし、左手に触らせる気もない。

ドアを開け、待ちかまえていた従兄が差し出す腕に義母を預けて中庭へと歩く。昨夜の話はしない。だが彼が今にも昨夜の件を話したそうにしているのは、明白だ。きっと説得したいことだろう。

逆にサーレは、彼が同行すると言い出した気の迷いを、正してや

らねばと思っている次第だが。実際、彼が屋敷を訪れてくれたのも自発的ではない。サーレが呼んだのである。

だがシーユの同行をさえぎりたい反面、議題が出航の相談に変わるかも知れないな、という予感も持ち合わせている。

午後の日差しは、昨夜とは別世界のような整った中庭と貴族らを、うすらかに照らしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823ba/>

海女神～ムイ・ヤハィタ～

2012年1月14日17時58分発行